

## 『とおい昔に』

——十九世紀のサップフォー研究とマイケル・フィールド——

滝口 智子

### 一、サップフォーへの科学的アプローチ——ウォートン版注釈書

イギリス十九世紀に、多くの詩人が古代ギリシャの女性詩人サップフォーからインスピレーションを受けて創作を行った。この時代サップフォー受容の大きな転回点となったのが、ヘンリー・ソントン・ウォートンが編集した注釈書の出版である。『サップフォーの伝記、テキスト、翻訳と翻案』（初版一八八五年）という題名のこの本（以下、ウォートン版と呼ぶ）は、当時おもにドイツで進展していたサップフォー研究の成果に基づいて、伝説のヴェールに覆われていたサップフォーを文献学という科学的アプローチから見直したものである。小論ではこうした見直しをもとにして生まれた十九世紀イギリスの女性詩人マイケル・フィールドの作品に注目し、その特質の一端を考察していきたい。

ウォートン版の出版以前サップフォーは、海へ身を投げた悲劇の詩人として広く知られていた。伝説によると彼女は、アフロディーテによって美しい若者に変身させられた渡し守ファオンに恋したという。だがその想いはかなわず、傷心のあまりレファスの崖へと向かう。そこは、恋に悩む者が身投げをすることで情熱を鎮める場所だった。紀元前四世紀に活躍したギリシャ中期喜劇の作家たちが、この話を題材に劇を書いたことが知られてい

る。ローマの詩人オウィディウスは「名婦の書簡」中の一編「サッフォーからファオンへ」において、失恋の悲しみを切々とうったえる身投げ直前のサッフォーを描いた。この作品は十八世紀初頭にアレクサンダー・ポープによって英語韻文に翻訳されている。崖の上で竖琴を手に最期の歌をうたう詩人のイメージは人々の想像力を刺激し、十九世紀には作家や画家・イラストレーターによる多くの作品を生んだ(Reynolds 2003, 67-73)。

身投げ伝説が一人歩きしていたのに加えて、サッフォーの詩作品そのものも十九世紀後半まであまり多くは知られていなかった。彼女の作品で人口に膾炙していたのは事実上、「アフロディーテによせて」と「かの人は神にも見えて」の二詩篇のみだった。その他の詩篇をギリシャ語が読めない人々が親しむ機会は、限られたものでもなかった。こうした状況を変えたのがウォートン版の出版だ。ウォートンは巻頭の「サッフォーの生涯」の中で、詩人の伝記において確認される事実はごくわずかでしかないことを歴史・文献学の立場から説明している。サッフォーは紀元前七世紀から六世紀に生きたレスボス島の詩人で、竖琴を奏しながら詩歌を朗誦していたことはほぼ間違いない。そして詩神に仕えながら、彼女の才能に惹かれて集まった少女たちに音楽や詩を教えることと推定される。しかしその生い立ちや家族をはじめとする古代の記述に決定的な証拠はなく、ファオンの恋愛や身投げもフィクションにすぎない。ウォートンはこれらのことを検証しつつ述べ、サッフォーにまつわる伝説のヴェールを取り去った。

ウォートンは「サッフォーの生涯」に続いて、サッフォー作と考えられる作品(多くは断片)を全編提示した<sup>[1]</sup>。まずはドイツの文献学者テオドル・ベルクの校訂に基づいてギリシャ語の原文を載せ、次に正確さを重んじながら自身による英語の散文訳をつけた。さらに幾つかの断片については、これまで英語に翻訳・翻案された詩の中から価値あると認めた作品を紹介する。最後に初めに挙げた原文が、どの古典作家あるいは文献からの引用であるかを示す注釈が添えられた。

サッフォーを「科学的に」捉えたこのウォートン版には、二つの大きな意義があった。一つはサッフォーの現存する詩作品の多くが断片であることを具体的に示したことだ。サッフォーが生きたのは口承文学から書かれた文学への移行が進んでいた時期だった。サッフォー自身は自分の作品を記録しなかったかもしれない。しかしおそらくは、その朗誦を聴いた聴衆の中にパピルスに書き留めた人々がいた。紀元前三百年頃に創設されたアレクサンドリア図書館には、サッフォーの詩を編んだ九巻が所蔵されていたという。しかし年月を経て次第にそれらの作品は失われ、前述した二つの詩篇(「アフロディーテによせて」は唯一の完全詩篇、「かの人は神にも見えて」もほぼ完成形に近いとされる)以外は詩のごく一部が切れ切れに、古代ギリシャの学者・作家たちの引用によって伝わるのみとなってしまった(Reynolds 2003, 14-15)。ウォートンがそれらの断片を一冊に集めたことによって、サッフォー作品はイギリスの読者にとってより身近なものになった。しかしそれと同時に、失われたものの大きさを目に見える形で明らかにしたのだった。

豊かなイメージに満ちた詩の欠片はサッフォーの詩才を示していよう。だがその一つ一つがあまりに短いため解釈が難しく、素人が読んで即座に詩として楽しめるとは限らない。ウォートン版はテニス、スウィンバーンを含む詩人たちによる英語韻文訳・翻案詩を添えることにより、そうした断片に秘められた可能性を浮き彫りにした。翻案を紹介することに、サッフォーの詩が自由に解釈されてしまうのを奨励する危険が潜んでいないとは言えない。しかしその一方で、断片に触発されて詩が生まれ、古代ギリシャ詩と英詩が創造的に融合していく様を伝えるという功績があった。

ウォートン版のもう一つの意義は、サッフォーが女性に向けた愛をうたっていることを静かに記している点だ。ウォートン版以前のサッフォー詩の英語翻訳は、女性である愛の対象を故意に男性代名詞に変更していることが多かった(Reynolds 2000, 21-22)。その結果ファオンの恋愛伝説も相まって、サッフォーは主に異性愛の詩

人として捉えられていた。しかしウォートンはサッフォーが描いた愛の対象を、原詩の読みに従って女性代名詞を用いて訳出した。これは、サッフォーの詩における女性同性愛が既定の事実として読者に浸透するのを促すことにつながった。<sup>22)</sup>

## 二・ウォートン版とマイケル・フィールドー名前のない愛

ウォートン版初版の四年後にマイケル・フィールドが詩集『とおい昔に』を出版した。フィールドは序文と後書きでウォートン版から影響を受けたことを明記し、感謝の意を述べている。本編には七十の詩篇が収められ、それぞれの詩篇にサッフォー詩の断片が、ギリシャ語原文のままエピソードとして挙げられている。多くの詩篇はウォートンによるその断片の英語訳で始まっている。翻案詩を添えることでサッフォー詩の回復を試みたウォートンに触発されて、フィールドは断片を膨らませて独自のサッフォー詩篇を創りあげていった。<sup>23)</sup>

ウォートン版からの影響は、フィールドが女性への愛をうたっている点にも見られる。フィールドがサッフォーの描く愛を引き継いだのは、詩人本人のセクシュアリティと全く関係がないとは考えがたい。男性名マイケル・フィールドは性別をカモフラージュした筆名であり、その作品はキャサリン・ハリス・ブラッドリーと姪のイーディス・エマ・クーパーによる共作だった。実在のサッフォーのセクシュアリティに関しては詩作品以外に確実な資料がなく、その詩作品も詩人の経験をどこまで反映しているかわからないため、現在でも不明である。ブラッドリーとクーパーには詩や劇作品のほかに日記や手紙が残っているものの、やはり二人のセクシュアリティを明確に定義することは難しい。二人は自らを「永久の恋人」と宣言し、互いを様々な愛称で呼び、死ぬまで共に暮らした。共同制作する自分たちの関係を婚姻にたとえており、ロバートとエリザベス・パレット・ブラウニング夫妻と会った後で、日記に「私たちは（別々に創作を行っている夫妻よりも）強く結ばれている」と記し

た(White 34)。しかしこのような強い絆を根拠として、彼女たちがいわゆる「レスビアン」(女性同性愛者)だったと結論を急ぐには慎重さを要する。フィールドが生きた時代は人々の性的アイデンティティが研究の対象となり始めていた頃だった。「レスビアン」もまだ女性同性愛を意味する言葉として定着してはいなかった。<sup>24)</sup> そのような時代に、女性が自分のことを同性愛者として意識し振る舞うことができたのか、という大きな問題が残るからだ(Thain 45-46)。

ブラッドリーとクーパーの関係、および彼女たちの描く愛に関する意見の相違は、リリアン・フェイダーマンに対するクリス・ホワイトの反論に典型的に見てとれる。フェイダーマンは、一九二〇年代以前の女性どうしの愛情は基本的に性愛ではなく「ロマンティックな友愛」と呼ぶべきものであるから、フィールドの作品における愛情もそう呼んでよいと示唆している(Fadernan 208-13)。「ロマンティックな友愛」とは十八世紀の中・上流階級の女性の間で流行した概念であり、この友愛を享受することは罪のない楽しみだと考えられていた(Fadernan 74-143)。女性どうしの愛は欲得にまみれた世俗社会とはかけ離れたイメージがあり、牧歌的な隠遁生活を連想させ、ある程度許容されていた(Donoghue 27-29)。これに対してホワイトは、二人の作品は個人的世界に安住する友愛ではなく女性の性愛を語る社会的・政治的意義があったとして、フェイダーマンに反論している(White 35-36)。

私は、異性愛との対話・対比を通して女性同性愛が描かれていることから見て、『とおい昔に』が個人的友愛のみを語ったと捉えるのは難しいと考える。異性愛が社会的に認知された愛の形であるならば、異性愛との対比にはある程度社会的な意義がありうるのではないか。『とおい昔に』は様々な愛の形が混交したテキストである。伝統的なファオンとの恋物語が全体の枠組みを成しており、その中でサッフォーの女性への情熱的な愛が語られる。研究者の中には、サッフォー作品の同性愛が知られるようになったこの時期に、フィールドがあえて慣習

的な異性愛伝説を描き続けたことに戸惑う者もいる。マリオン・サインは「フィールドはなせもつと同性愛に集中しなかったのか」という疑問から考察を進め、詩人は故意に、同性愛も異性愛も含む「多面的で不定形の欲望」を描いたと示唆している(Plain 82-83)。一方ホリー・レアードは、フィールドの詩にある「矛盾」を指摘する。つまりフィールドは異性愛という社会の決まり事を覆そうとしつつも、同時にそうした決まり事に「従い協力している」という(Laird 82)。私は、フィールドが異性愛伝説を描いたのは、故意に不定形の欲望を描くためというよりも、異性愛との対比を通して同性愛という新しい愛の形を模索するためだったのではないかと思う。もしそうであれば、フィールドが異性愛を描いたのは矛盾ではなく、むしろ同性愛を表現するために必要なことだったのではないだろうか。

フィールドが『とおい昔に』を書いた時点では、詩に描かれた女性同性愛のモデルは、姉妹愛や母娘の愛を除けばほとんどなかった。後述するように、暗示的に女性どうしの愛情が描かれることはあった。しかしそれにはいわば、まだ名前がなかった。フィールドの書こうとしている愛はまさにこれから名づけられ、探求されようとしているところだった。異性愛をモデルにするべきなのか、それとも全く違ったものなのか。異性愛と相容れるものなのか対立するものなのか。こうしたことすべてを手探りの状態から探っていかなければならなかった。ウォルトンの提示したサツフォー詩はそれが断片の集合体であるがゆえに、フィールドに同性愛を模索しつつ、サツフォーのテキストの欠落部分を創造的に埋めていくという大きな課題を与えたのである。

以下の節では、フィールドが『とおい昔に』においてどのようにサツフォーの断片を膨らませて女性同性愛を描いたのか、その一端を異性愛との対比に注目しながら読んでいく。そして、最後にフィールドの同性愛描写に他の十九世紀女性詩人の影響も見られることを示唆して小論を結ぶことにしたい。

### 三、花輪を編む乙女たち

『とおい昔に』の第一歌は、ウォルトン版におけるサツフォー詩の断片七十三「その頃かの人たちは花輪を編んでいた」をエピソードとしている。この断片は他の多くの断片と同じく、わずかな単語の詩の欠片である。これをフィールドは発展させて、乙女たちの「花輪」詩作と美への献身をうたった。

その頃乙女たちは花輪を編んでいた

うつくしい青春の盛りの

息吹と歓喜を知っていた

至福のうちに葦の冠を編んで

花輪をのせた色白の額に 何度もなんども

くちづけをした

その頃乙女たちは花輪を編んでいた

若いアポロ神から 金色に光る

愛の神秘を学んだ

豎琴の音にあわせて 魂が歌となってあふれた

木陰に身を横たえて 風にそよぐ葉の下で

明るい夢を追いかけていた

その頃乙女たちは花輪を編んでいた 聖なる花輪を！  
杯を飾り 深い青春の喜びという名の  
葡萄酒を飲んだ

その喜びはいまに伝わるけれど 神の手に豎琴はない—  
それでもその頃乙女たちは 歌の調べにあわせて  
舞いつづけていた

花輪を編む行為は青春を謳歌し、舞い歌うことであり、更には乙女たちの官能的な愛の交感を暗示している。彼女たちは「何度もなくちづけをし」、「愛の神秘を学んで」いた。「風にそよぐ葉」は揺れる梢の間から見える空、頬に当たる風、葉の擦れあう音といった視覚、触覚、聴覚の喜びを喚起し、「木陰に横たわり」「調べにあわせて踊る」ときの地面のひんやりした感触は、ほてった肌へのくちづけを一層暖かく感じさせる。この詩はレスボス島に生きたサッフォと、彼女から詩歌を学ぶ乙女たちの日々を描いたものである。更にヨーピー・プリンスのように「葉」(leaves)に「本の頁」の意味を見出すとすれば、これに続く詩集の頁には乙女の「明るい夢」—詩歌と愛—が描かれることになる、という宣言も含まれているのだらう (Prins 87)。そして「花輪」は、サッフォや乙女たちに成り代わった詩人フィールドが編む詩篇の数々であるのかもしれない。

花と花輪のイメージは詩集を通して繰り返し現われる。第六歌のエピグラフはウォートン版の断片六十一「きれいな声の乙女」である。語り手サッフォは教え子(あるいは詩人仲間)のエリンナに愛を込めて呼びかける。

エリンナ あなたは永久に美しい

わたしたちの青春は永遠のもの

咲けばすぐに散ってゆく 春の花々とは違い

髪に月桂樹を挿しているから

詩神たちの生まれた地 ピエリアの露に洗われた薔薇の花は

枯れて枯れることがないという

薔薇がはじめて芽吹いたのは 豎琴弾きオルフェウスの墓のそば

九人の女神が 揺れる月明かりのもとで

美しい音を奏でた彼をまつ 鎮守の森に足をはこぶ

詩神たちはそれぞれが 愛する詩人をえらび

枯れることのない花を摘む

笛もつ女神エウテルペは 私のように美しいエリンナの

声を聞いて走りより 自身も歌をうたいながら

あの娘の髪を飾る花輪を編んだ

エリンナも仲間である「私たち」も永遠の美と若さに恵まれている。それは「月桂樹」を髪に挿した詩人であるからだ。豎琴の名手オルフェウスの墓に育つ薔薇が枯れることがないのは、詩人の名声が不滅であることを暗示する。彼の墓をまもる詩の女神たちは、今もお気に入りの詩人を見つけては永久の誉れを授ける。こうして語り手サッフォは、きれいな歌声で詩神から花輪を贈られたとして「美しいエリンナ」を褒め称える。フィールドの描くサッフォと乙女たちは詩歌の神々(アポロ神と九人のムーサ)に守られた聖なる女性の共同体を形成

し、ここでは詩作・美・愛が一体のものとして祝福されているのである。

#### 四. 踏みにじられる花

前述のように『とおい昔に』においては女性同性愛だけでなく、異性愛も同様に称えられている。サッフォアの失われた九巻本のうち一卷は、乙女の結婚に際して歌われた祝婚歌集と推定されており、ウォートン版にもその断片とみられる詩篇が掲載された。フィールドはそれらの断片を用いて祝婚歌を独自に復元している。婚姻の神ハイメンに呼びかけて、時や死から花婿と花嫁を守るようにと祈る第五十五歌、花嫁の喜びをうたった第四十二歌、「金色の花」のようなクレイリス（サッフォアの断片に登場する名前で、彼女の娘と考える研究者が多い）を花嫁に迎える花婿を祝福する第四十七歌がその代表だ。

しかしこのように称えられる異性愛は、ときに乙女たちの共同体をうち壊すものとして登場する。前節で述べたように花や花輪は女性の詩作・美・愛の世界を象徴するものだった。第五歌でも語り手サッフォアは自らをヒヤシンスの花にたとえる。そしてウォートン版断片九十四「羊飼いが丘で野のヒヤシンスを踏みつけるように」に触発されて、愛するファオンに拒否された経験の花が踏みにじられるイメージに重ね合わせる。

紫色の花は 地面に踏みにじられて粉々になった

そのきよらかな茎は 夏の光のなかで

もう起きあがることはない

そして死がひそやかに 草露とともに訪れた

花の死は女性の創作力の減退や共同体の崩壊をも暗示していよう。異性愛の経験により「乙女の日々」(maidenhood)を失ってしまう悲しみは繰り返し描かれる。処女性を象徴する月明かりのもと、サッフォアと乙女たちが悲しげに舞う第十七歌や、結婚によって敵対しあう仲となった親友レートとニオベを嘆く第五十六歌、人間に恋して息子を産んだ詩の女神クリオの哀しみに共感をよせる第五十七歌などがその例だ。女性の聖なる共同体を描いたフィールドは、伝統的なサッフォアの異性愛伝説における愛の苦しみを、理想的な詩作・美・愛の世界を壊すものとして再提示したのである。

異性愛はこうして『とおい昔に』に暗い影を落とし、詩集後半の七編では、ウォートン版以前の伝説に従ってサッフォアの身投げが暗示される。竖琴を手に歌い続けたいとアポロ神に祈願するも空しく、サッフォアは想いに応えようとしないファオンへの恨みを吐露しながら死に向かっていく。最終詩篇は自分の名声が死後も続くようにと願う彼女の最期の歌だ。これは十九世紀に繰り返し描かれた悲劇的なサッフォアの姿だった。

#### 五. とおい昔に―呼び交わす過去と現在

『とおい昔に』においてフィールドは、同性愛と異性愛を対比させながら、最終的には前者を後者によってうち壊されるものとして描いた、と大まかに捉えることができる。そして一見、サッフォアの死によって乙女の共同体は終焉を迎えるように見えるかもしれない。しかしその一方で、女性どうしの愛は異性愛と違い別れや死を乗り越えることもまた、暗示されている。

第十四歌のエピグラフはウォートン版の断片百二十六「いとしい娘よ」だ。

アティス いとしい娘よ、あなたが葦の葉しげる

小川の岸边に分けいって 見えなくなったとき

わたしははっとして怖くなった

あなたが死ぬような気がしたから

水の流れが静まっていた

魂が連れ去られたかのように

そのとき ギョリヨウボクの枝のあいだから

澄んだ青い瞳がきらめいた

わたしのためにアヤメの花を摘もうとして

背の高い草々のなかにとびこんだのだった

わたしは手にしていた花々を空高く投げて

あなたをこの胸に深く抱きよせた

いとしい娘よ！ わたしたちの息はひとつに溶けあい

昼も夜もわかつことはできない

曙の女神が空に昇るとき 二人はひとつの床に結ばれている

小鳥のように羽ばたいて 離れたりしないで

アテイスお願ひ あのおそろしい

死の恐怖をもう味わいたくないから

アテイスはウォートン版断片三十三「アテイス、あなたを愛していました」とおい昔に」に登場するサッフオーの恋人だ。二人の別れを示すこの断片は、第十四歌に描かれた死と別れへの怖れが現実のものとなることを示している。恋人との至福の時がいずれ帰らぬ過去になってしまうことを。しかし第四十九歌では、月明かりのもので眠りにつく乙女たちを見つめるサッフオーが、夢の中で「とおい昔」の輝きは取り戻されるとうたっている。

……乙女たちが横たわり

幸せな夢を見るときに

金色の時代が再び燃えあがる

月明かりのもつとで

眠りまどろむときに

青春は再び命を与えてくれる

とおい昔に消え去った

あの輝きと至福に

ここにはフィールドより少し上か同世代の詩人、クリステイナ・ロセッティやアゲネス・メアリー・ロビンソンがうたった、夢の中での愛する人との邂逅というモチーフが現われている。ロセッティの「こだま」では語り手が愛する女性に向けて「静かな夜に会いに来ておくれ」と呼びかける。そして夢の中で「とおい昔」のように「息を交わす」ことで、死後も再び生きることができると語りかける。

ふっくら柔らかな頬 小川にきらめく  
日の光のように 明るい瞳の人よ  
涙に濡れて来ておくれ

ああ過ぎ去った日の思い出 希望 愛よ ……

それでも夢のなかで会いに来て 死んで冷たい  
わたしがもう一度生きられるように  
夢のなかで会いに来て

鼓動と鼓動 息と息 交えることができるように

そっと語りかけ より添ってください 愛する人よ

とおい昔 はるかに遠い日のままだ

(“Echo,” Rossetti vol.1, 46)

ロビンソンはウォートン版のサッフォー断片三十三から発展させたかのような八つの連作詩「翼のない愛」を一八九七年に発表している。ここでは語り手が別れた恋人に向けて「すべてが死んでいるのに／すべてが永遠のように思える」(第八歌)とりたい、二人の幸せな日々は夢の中で生き続けると結んだ。

愛と目の覚めるような想いに満たされた幸せな日々

そのすべてが死んだ

何も今に残っているものはない 二人がしたこと

つくったことも 言ったことも

でもいつか夢に見たの アイダの丘で

あなたと二人腰下ろし うたったことを

わたしの人生の こだまのなかで

二人はいつまでも そこでうたい続けています

(“Love Without Wings,” Robinson 48-50)

ロセッティが「こだま」を書いたのは一八五四年である。兄のダンテ・ゲイブリエルがサッフォー詩(断片九十四)の翻案を創作している(Wharton 105)ことを考えれば、ウォートン版以前に彼女が兄を通じてサッフォー詩篇に親しんでいた可能性は皆無ではないだろう。ただし年代的には女性同性愛の概念が形成される以前のことであり、ロセッティ自身そうした愛を描く明確な意図があったとは考え難い。「こだま」の語り手が呼びかける女性性は詩人の分身かもしれないし、愛、希望、過去の思い出の擬人化であるかもしれない。しかしそうだとしてもなお、情熱をもって呼びかける対象が女性であることは注目すべきであろう。ロビンソンの場合は大学で上級ギリシャ語を学んでおり、サッフォーの詩に親しんでいたと思われるので(Reynolds 2003, 129-31)「翼のない愛」にもその影響があるかもしれない。サッフォーの直接的な影響がこれらの作品にあったのかどうか。いずれにせよ、二人の詩人が暗示的に描いた女性への愛、夢における思い出の再生というモチーフはフィールドのサッフォー詩篇へとつながっている。

フィールドはこのように十九世紀女性詩の伝統も受け継ぎながら、サッフォー詩断片を敷衍していった。そのとき女性詩の中に名づけられない形ではのかに暗示されていた女性への愛が、ウォートン版の影響を受けたフィ



ールドの手によってより明確な輪郭をもつようになった。

## 注

- (1) ウォートン版の出版以降に、エジプトのオクシリュンコスの発掘でこれまで知られていなかったサッフォー断片を含むパピルスが発見された (Reynolds 2003, 220-21)。二十世紀に入っても考古発掘物のパピルス・羊皮紙・陶器の破片等からの発見が続いているが、欠損や判読不明のものが多い。
- (2) サッフォーの同性愛がまったく知られていなかったわけではない。フランスではボードレルが「悪の華」(初版一八五七年)の禁断詩篇においてサッフォーを同性愛者として強烈なインパクトで描いていた。「レスポス」を含む六編は裁判により有罪となり、初版の後削除された。
- (3) フィールドは後述のアクネス・メアリー・ロビンソンと同様、当時の女性としては珍しくギリシャ語教育を受けていたため、ウォートン版以前にもサッフォー詩の断片に親しんでいた可能性はある (Hurst 82-83)。
- (4) これ以前にサッフォーの同性愛がイギリス詩に描かれた例として、スウィンバーン作『詩とバラッド』所収の詩篇「アナクトリア」と「サフィックス」がある。ボードレルの影響下に書かれたこれらの詩篇は、その官能描写のゆえに、「忌まわしい悪徳」に煽られて書かれた「肉欲的な詩」と批判された (Marsh 35-45)。
- (5) フィールドの友人ハヴェロック・エリスが同性愛に関する医学書を発表したのは一八九七年であった。エリスは同性愛を病気・犯罪・不道徳と捉えずに研究した最初の性科学者の一人である。
- (6) lesbian が女性同性愛を表す形容詞として用いられるようになるのは一八九〇年代からである。OEDを参照。
- (7) garland には「花や葉でできた花輪、冠」および「詩集」の意味がある。OEDを参照。

## 引用・参考文献

- Donoghue, Emma. Ed. *Poems Between Women: Four Centuries of Love, Romantic Friendship, and Desire*. New York: Columbia, 1997.
- Faderman, Lillian. *Surpassing the Love of Men: Romantic Friendship and Love between Women from the Renaissance to the Present*. London: The Women's Press, 1985.
- Field, Michael Long Ago. London: George Bell and Sons, 1889.
- Hurst, Isobel. *Victorian Women Writers and the Classics: The Feminine of Homer*. Oxford: OUP, 2006.
- Laird, Holly. *Women Coauthors*. Urbana: U of Illinois P, 2000.
- Marsh, Jan. *Christina Rossetti: A Writer's Life*. New York: Viking, 1994.
- Prins, Yopie. *Victorian Sappho*. Princeton: Princeton UP, 1996.
- Reynolds, Margaret. Ed. and Introduction. *The Sappho Companion*. London: Chatto & Windus, 2000.
- . *The Sappho History*. New York: Palgrave Macmillan, 2003.
- Robinson, Agnes Mary Frances. *An Italian Garden: A Book of Songs*. Portland: Thomas B. Mosher, 1897.
- Rossetti, Christina. *The Complete Poems of Christina Rossetti, A Variorum Edition*. Ed. R. W. Crump. 3 vols. London: Louisiana State UP, 1986-1990.
- Thain, Marion. 'Michael Field': *Poetry, Aestheticism and the Fin de Siecle*. Cambridge: CUP, 2007.
- Wharton, Henry Thornton. *Sappho: Memoir, Text, Selected Renderings and a Literal Translation*. New York: Brentano's, 1920.
- Williamson, Margaret. *Sappho's Immortal Daughters*. Cambridge, MA: Harvard UP, 1995.
- White, Chris. "Poets and lovers evermore: the poetry and journals of Michael Field." *Sexual Sameness: Textual Differences in Lesbian and Gay Writing*. Ed. Joseph Bristow. London: Routledge, 1992. 26-43.

沓掛良彦『サッフオー詩と生涯』平凡社 一九八八  
ボードレール『悪の華』安藤元雄訳 集英社文庫 一九九一